

## 「変身」念じて活力増進

先端基礎研究センター次長 萩原 幸

“をとこもすなるにきといふものを をむなもして みむとてするなり”，諸兄ご存じの紀貫之作土左日記の冒頭の一句である。我々の基礎研究について何か書いてみようと、考えを巡らしているとき、ふと思ひ浮かんだ。男もするという日記を（女に扮した作者が）私も書いてみようと言うわけである。いささか突拍子もないが、このまま連想ゲームを進めてみよう。

ずっと以前の話になるが、石油化学工業が全盛のころ、大手の化学会社は競って基礎研究所を作った。ポリプロピレンの製造技術を導入しようと、イタリアのモンテカチニ社に日本からは何社もが交渉に行き、モンテ参りという言葉が囁かれたほど、盛んな技術導入が行われた。その結果、石油化学産業は大変に潤った。その余勢をかって、自前の技術開発を標榜して基礎研究に力を入れようというのであった。しかし、過剰な設備投資をした各社が不況に陥り、方針を転換したため、この試みは惨めな結果に終わった。気が付くと、基礎研究所は依頼分析などで日銭を稼ぐようになっていた。

今また、基礎研究重視の声が高まっている。振り返ってみると基礎研究が大切だと言う声は我が国では四六時中悲鳴にも似て絶えず聞こえていたことではある。科学技術と言えども基礎研究は、他の文化活動と同様に常に脆弱な土壌の上に置かれてきた。少しの環境変化ですぐに枯れるか、吹き倒されるかしてしまう。今度のような基礎研究重視の声で、若干の慈雨に恵まれ、再び若葉が芽を出すと言うわけである。しかし、この若葉もこの時期に育っておかないと、あえなく命を落とすことになりかねない。生まれたばかりの我がセンターにとっては大変に重要な時期である。

何ごとものものが育つには内なる活力と外からの支援が必要である。支援を得るものになるものは、人に訴

えかける力である。基礎研究の必要性を説くときに、無駄な研究も必要だと言われることがある。しかし、あまり使いたくない言葉である。どことなく曖昧な研究も許されるような言い方だからだ。宗教に似て、目指す彼岸が描けていない研究は人に訴える力がない。言わずもがなのことである。

さて、この小文の主題にはいる。研究のやり方、パフォーマンス、又は、内なる活力についてである。年月を重ねると、誰にも慣れ親しんだやり方ができてくる。しかし、進歩の早いこの頃では、これも次第に単調で、活力不足と映るようになり、人に訴える力を失うことは避けられない。そんな時、思い切った変化が必要であるが、タイミングを捉えるのが難しい。幸い、誕生後間もない我がセンターには変化を歓迎する気分が溢れているので、今が絶好の機会である。始めの唐突な連想は、この変化を考えるテクニックとして自分を別人に置き換えてみてはどうだろうとの思いからである。これまで自分を縛っていたものが消え、従来とは違う方向が見えるようになる筈である。

そろそろ結びにはいらなければならない。まず、冒頭の一句だが、貫之は自分を女になぞらえることで、漢文日記の単調さを破ろうとした。こんなやり方は世人のひんしゅくを買う危険を伴うものであったろうが、その効果は後に平安才女の輩出、仮名文字による新文学の完成となって現れた。あなたも「変身」を念じてみてはいかが。急に気分が新鮮になり、普段とは違う考えとともに活力が湧いてくるから不思議である。日頃の問題に対しても、いろいろなやり方が見えってくる。

柳の下にいつもどじょうはいないの諺もあるが、ともあれ、活力は我がセンターの命のもとであり、常に増進を心がけていきたいものだ。